『投贈和答等諸詩小序』について

On "Tōzōwatōtō Syoshi Syōjo"

蔭木英雄

はじめに

私の十五年前の旧著『五山詩史の研究』（笠間書院刊）は、いま読みかえすと冷汗三斗の思いで、早く改訂増補しなければ――と思い続けて久しい。中でも、『竹居清事』『竹居西遊集』の著者翱之恵鳳（こうしえほう）について、

百三十余歳という高齢まで生きたということになる。そして師の岐陽方秀を拝した時は、少くとも七十歳になっていることになり、あまりに常識を逸しているので、何度も検討してみたが、やはり右のように推定せざるを得ない。（同書三二八頁）

という、とんでもない間違いを書いてしまっている。それは、『五山文学全集』第三巻所収の『投贈和答等諸詩小序』（以下『小序』と略記）を、編者上村観光氏の説をうのみにして、翱之恵鳳の著と決めてかかったからであった。

この事は夙に玉村竹二先生から御指摘を受けていたが、今泉淑夫氏も、

翱之は応永二十一年（一四一四）の誕生である。（中略）とすればその生誕に先立つ『小序』の世界は翱之とは別人のものでなければならない。（『日本歴史』昭五七・五月「翱之恵鳳小考」）

と述べておられる。爾来、筆者は『小序』の作者を明らめようと努めてきたが、馬齢を重ねるのみで成果が上らないので、不本意ながらここに中間発表することにした。なお『五山文学全集』は、『小序』の作品に一から八十までの通し番号と小題を記しているので、拙稿もそれを利用して論述する事にした。

一　『小序』の作者

『小序』の作者としては、義堂周信（一三二五～一三八八）、大本良中（一三二五～一三六八）、心華元棣（?～?）が確認され、雲渓支山（一三三〇～一三九一）、惟忠通恕（?～一四二九）が推定されるのである。以下、この五人について述べる。

Ⅰ　『小序』六十五「通玄庵」は義堂周信の『空華集』巻十の「題通玄庵叙」[1]と殆ど同文であり、『空華日用工夫略集』（以下『日工集』と略記）（永徳三、二、十三）[2]にも記されている。ただ『小序』の〝以道相牧〟、〝幽趣蕭然〟は、両書では〝以道自牧〟、〝幽致殊蕭然〟（以下、傍点はすべて筆者）となっているのである。『日工集』によると、義堂周信はこの日、東山観持庵の檀那三善氏に招かれて七言の偈二首を作り、そのあと野服に着更えて双林寺塔頭通玄庵に遊び、七言律詩二首を庵主に書き与えた。それが『小序』六十五「通玄庵」なのである。作者義堂周信については、ここで更めて説明するには及ぶまい。[3]

Ⅱ　『小序』八「送別」は、『関東諸老遺藁』の中の、大本良中の九篇の中の一である。[4]題を欠いているが、前後の作品と同じく詩軸の序跋であろう。大本良中は、

応安元年中冬二十日寂、年四十四。師与義堂信公同庚友善、才亦相若。（『延宝伝灯録』二十二）

大本・義堂同年同友、正中乙丑生、本四十四亡。福不逮恵、寿不及義堂、叢林至今惜之。（「雪村大和尚行道記」）

とあるように、正中二年（一三二五）に生れ、応安元年（一三六八）十一月二十日に示寂した一山派の僧である。そして、

貞和初、辞入支那、十年而還。（『延宝伝灯録』）

受師指揮入唐。（「雪村大和尚行道記」）

と記され、二十歳ごろ、雪村友梅の勧めにより十年間、中国の禅林を遍参し、帰朝後、一山派の東林友丘の法を嗣いだ（法系は稿末参照）。『小序』八「送別」は、建長寺玉雲庵（一山一寧の塔所）中の蔵密軒にいた頃の作品である。その後、甲斐の常牧山浄居寺（山梨市）[5]、上野の良田山長楽寺（群馬県新田郡世良田）[6]、信濃の保福山善応寺（下高井郡山内町）[7]に歴住した。同年令の友義堂周信は大本良中の為に、「中大本住長楽行政疏」[8]、「中大本住長楽江湖疏」を製作し、示寂の報に接するや、

烏乎、正宗将滅、邪論横生。丁茲時也、宗門遽失黼黻之才。可不哀哉。

と哀しんでいるのである。

ところで「送別」冒頭の〝某上人〟というのは、『関東諸老遺藁』によると福山座元九峰虔公、即ち仏光派の九峰信虔なのであった。大本良中は四十歳の冬、建長寺玉雲庵に来たが病気に罹り、熱海に湯治に出かけ、そこで九峰信虔と邂逅した。二人は福源山

禅興寺（開山は大覚派の蘭渓道隆）の祥光庵で久濶を叙し、九峰が武州に帰国する際、大本は五言二十句の長篇を製作して贈った。その序が『小序』の八「送別」なのである。

●九峰信虔は関東在住時代の義堂周信と雅交を結び、その名は『空華集』に頻出する。大本良中と同じく、義堂も屢々禅興寺祥光庵を訪れて詩を応酬し、「虔九峰住清見法眷疏」「虔九峰住浄妙江湖疏」を製作し、

九峰は禅文兼学にして尤も詩を能くし、江西派下（黄山谷を祖とする詩派）の作者と、数百載の上に抗衡す。是れ余の畏服する所なり。（「懐仙巌詩巻序」）

と九峰の詩才を称え、永徳元年（一三八一）六月十三月に示寂したとき、「祭九峰和尚詩」を京から霊塔に送った。

Ⅲ　『小序』の五十三「翫味」、五十四「鮑知」、五十五「哀悼」、五十六「目撃」、五十七「首衆」、五十八「聖旨」、六十二「杜工部」、六十三「顒使」の八篇は、心華元棣の『心華詩藁』に収載されている。[9] 番号のとんだ五十九「殿下」、六十「叡想」、六十一「手勅」は、『心華詩藁』には見出せない。

心華元棣も先学の詳しい紹介がある。[10] 義堂周信も〃五百僧中一白眉〃（「寄聖寿心華次韻」）とか、

雄文を篇首に序する者は、今の聖寿心華棣師にて、僧中の董狐なり。（贈諒上人詩巻序）

と高く評価し、太白真玄も『峨眉鴉臭集』で、

定恵の心華は乃ち独歩の才なり。故に天下桃李の士、悉く競いて其の門に遊ぶ。（次心華上人韻呈道元首座）

と景慕している。

さて、『小序』の心華作品の冒頭に、〃某上人〃〃某禅師〃などと記す禅僧は『心華詩藁』によれば、大伝知蔵上人（大伝有承）、東濃真弟（固有名詞不明）、洞春月渓侍者（月渓□明）、在先開士（在先知有）、道元禅師（道元文信）、謙中大禅師（大中善益）で、心華の雅交の範囲が知り得る。以下これら詩友について略述しておこう。

●大伝有承は大本良中と同じく一山派で、太清宗渭の法嗣である（拙稿末の法系図参照）。心華元棣は〃儒釈兼通実且華〃（「次韻答大伝蔵主」）と称え、詩偈の応酬を重ねている。

●月渓□明は曹洞宗宏智派の建仁寺洞春庵別源円旨の法嗣で、越前の僧らしく思われる。中巌円月は『東海一漚集』に、

月渓明侍者、別源兄徒弟也。頗聡明而人物亦可敬矣。（「氷玉斎銘」）

と敬愛の念を表している。後述の惟忠通恕も、「次希白蔵主韻寄越山月渓侍者」とか、「送月渓侍者帰越」「答月渓侍者見寄」など、月渓と詩文の交を結び、示寂に際しては、「次韻棣心華悼月渓侍者」という哀悼詩を作っている。なお、一山派の聞渓良聡は初めは宏智派の東明慧日に参じており、一山派と宏智派の結びつきが

ここにも見られるのである。

●在先知有は後に法諱を希譲と改め、聖一派の龍泉令淬の法を嗣いだ。[11] 建仁寺の無涯仁浩の請客侍者を勤めたので、惟忠通恕と親しく、又、頑石曇生会下で後堂首座になったので、心華元棣とも交わり『空華集』に「在先有上人」、「送愚渓至書記帰真福兼簡其伯有在先」の律詩があるので、義堂周信の教えも受けたようである。

●道元文信は観応二年（一三五一）頃来朝した元の禅僧で、永徳元年（一三八一）ごろ帰国した。三十年間の日本滞在中は主に建仁寺に掛搭し、義堂周信・心華元棣・太白真玄・惟忠通恕らと交わった。例えば義堂は、

余以丙午（一三六六）冬、自関左再游京輦、抵于東山。仮榻故人永相山之室、与道元諸友夜話。（「除夜感懐詩序」）

と夜話に興じている。博多の石城山妙楽寺内呑碧楼で作られた詩軸に、大本良中と道元文信の作品が並載されているのも、『小序』の性格を暗示していて興味深い。

●謙中大禅師即ち大中善益は周防の人で、法海派に属し、惟忠通恕とは遠い法眷に当る。（拙稿末の法系図参照）心華元棣は、

前瑞岩寺益公座元禅師、字以謙中、特命其友東濃棣子、釈其義焉。吾侈深所敬畏、事無小大難易、有命必応。（「謙中説」）

と親交を述べ、「仏心寺請謙中座元山門疏」を作っている。瑞岩寺も仏心寺も土岐氏が外護する禅寺である。大中が南禅寺六十世住持となった時、太白真玄が「大中住南禅山門疏」を書いている。

ところで、『小序』の六十三「顗使」とは、仏心寺和尚即ち謙中（大中）善益が美濃・尾張・伊勢の三州府君前光禄大夫源公（土岐頼康）の牒書を、美作興雲寺に隠棲する心華元棣に送った専使のことである。土岐頼康は後述する雲渓支山の父であり、『小序』の作者はますます網の糸のように関連し合っている。

以上、義堂周信・大本良中・心華元棣の三人の作品は、『小序』以外の外集によって確かめられる。だが以下は筆者の推定である。

Ⅳ　まえにⅢで心華元棣の作品であると確定し得なかった五十九「殿下」、六十「叡想」、六十一「手勅」は、私は惟忠通恕の作ではないかと考える。

『心華詩藁』には、「上太上皇謝賜食并序」（『小序』五十八「聖旨」と同じ）に続いて、

臣僧元棣重用霄字韵、奉献親王殿下。

という作品があるが、『小序』五十九「殿下」は、

臣僧某謹奉聖旨、詣于南内、陪侍太上皇陛下、親王殿下。茲一日辱蒙殿下特賜玉章、昭回之光寵飾草莽。（後略）

とあって、心華とは別人の作品と思われる。『小序』の次の六十「叡想」は、

臣僧某、一日偶有負薪之憂、不得朝焉。上皇辱垂睿想、来明便蒙寵慰、茲及日午。中使伝命、特賜善薬一器。聖眷所加、

何病不除之有焉哉。晩間更賜梅花・頭綱之茶三品。（後略）

であり、惟忠通恕の『雲壑猿吟』をひもどくと、

奉謝　上皇賜善薬并茶次韻

年来吾道属艱難　両鬢如霜心似丹　天上龍団今已賜　金莖仙露未曽乾

という七言絶句がある。傍点の語を考え合すと、六十「叡想」は惟忠通恕の作であると推定され、その前後の「殿下」「手勅」も同様に考えられる。

●惟忠通恕の生年と出自は不明、仏源派に属する。義堂周信が、

釈而通儒、（中略）妙喜老人著惟忠字説。（「惟忠説」）

と記しているので、惟忠は仏教学のみならず儒学にも通じ、妙喜老人即ち中巌円月に従学したらしく、

東山惟忠恕公記史、禅文兼熟、而与余（義堂）最善。以丁卯（一三八七）秋、暫別為南海游、出紙求語云々。

とあって、学芸は義堂周信に負う所が多かった。惟忠通恕は『繫驢橛』に、

吾友心華老師、頃屏迹于山陽、一榻澹如、実無悶於世者也。（「寄聖寿長老心華老人」）

と記して心華元棣と雅交を結び、後に横川景三が『補庵京華後集』で、

乃翁永源老師（惟忠通恕）道高一世、望重叢林、蓋古仏之応世也。顕山相公、夙欽其風、百揆之暇、咨詢法要。（「竹浦字説」）[12]

と述べるように、足利義持の篤い帰依を受けて、越中金剛寺、山城安国寺、そして建仁・天龍・南禅の大官寺に歴住し、永享元年（一四二九）九月二十五日、東山常在光院で示寂した。

V　次に『小序』の作者として推定されるのは、土岐頼康四男の雲渓支山である。

『小序』には、金華山法雲寺という寺名が三篇（二四、三八、四六）、赤松山宝林寺が五篇（十二、十四、二九、四六、四八）、西岩が四篇（十二、二八、二九、四十）、宝華山護聖寺が十九の一篇、そして、これらの寺々が所在する播陽（兵庫県南部）という地名が五篇（七、九、二二、四九、七三）に出てきて、実質合計十五篇が播磨に関連している。これらを綜合して考えると、播磨守護の赤松氏が浮び上ってくる。

●金華山法雲寺は「雪村大和尚行道記」によると、

丁丑之年（一三三七）冬十月望、創建大仏殿。寺名法雲昌国、山号金華、皆宸筆也。被旨己卯冬十一月至日。位于諸山之列。而定十方住持者。

とあるように、赤村則村が延元二年冬、雪村友梅を開山として、赤穂郡上郡町苔縄に創建し、暦応二年（一三三九）に諸山に列せられて、十方住持制（一つの門派に執われずに広く住持を登用）をとった。山号は、中国浙江省金華県北にある赤松観（道教寺院）に

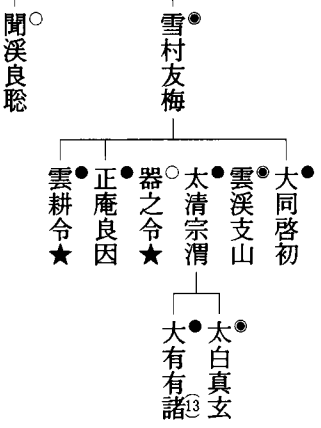
拠っている。

●赤松山宝林寺は、

宝林寺、元在備前新田庄中山、貞和中、則祐建立、請師開山。（中略）文和四年春、移建播州今地。九月二日、列天下十刹、住持有承。

という「雪村大和尚行道記」によると、赤松則祐が父則村の遺志をついで、岡山県和気郡和気町中山に、雪村友梅を開山として建立し、文和四年（一三五五）春に兵庫県赤穂郡河野原に移して、諸山より一段上の十刹に列せられ、一山派相承の寺となった。

十四世紀中ごろ、法雲寺（○印）宝林寺（●印）に入寺した人で、筆者が確認出来た僧を法系図から抜き出すと次のようになる。



十方住持制の法雲寺には右のほか、竺堂円瞿（燄慧派）、天境霊致（大鑑派）、汝霖妙佐[14]（嵯峨派）、仲方円伊（大覚派）、勉之肯旃（仏光派）が住持となっており、また宝林寺には嗣法不明の、大春上人[15]、用中口妙、蒲庵口睦が入院している。

そこで右の一人一人の文学的経歴を調べてみると、『雲渓山禅師語録[16]』の冒頭に次のような文章があった。（句読点、傍点は筆者）

相国雲渓支山

師諱支山字雲渓。玉龍庵卵塔曰明空、播永良有宝華山護聖寺[17]、寺十境蒲団山禅定岩。方丈有西岩之額、有西岩集二冊律詩也。室名曰賸隠、有賸隠集五冊。

方丈と室名に因んで、雲渓支山には詩集『西岩集』と外集『賸隠集』とがあったという。すると『小序』の、

癸丑（一三七三）冬、某上人、枉駕過余於播之宝華。（十九「謝辞」）

某上人（中略）冬中又見訪余於西岩。（十二「恨相見之晩」）

向喜某上人、来過西岩賸隠之室。（二八「和詩」）

余頃謝事於宝林、帰臥西岩旧隠。（二九「謝訪」）

某上人、偶自雲岩旧隠来、訪余病於西岩山堂。（四十「逢乖」）

の五篇は傍点の語から、一山派の雲渓支山の作と推定してほぼ間違いない。四十の雲岩というのは京の西禅寺の開基塔である。西禅寺開基は小串範秀で、彼は大覚派の石庵旨明を開山に請したが、雪村友梅にも深く帰依し、赤松氏とも誼を通じていた。

●雲渓支山について、玉村竹二氏の『五山禅僧伝記集成』（四二頁）と重複を避けて略述しておく。『黄龍十世録』『東海一漚集』

『乾峰和尚語録』に、それぞれ「雲石」[18]の道号頌が載っているので、雲渓支山は龍山徳見、中巌円月、乾峰士曇[19]の三禅師の教えを多少ながらも受けていたのであろう。『空華集』には、

金華洞接宝林幽　二老風流未白頭（「送芸蔵主兼簡雲石竺芳」）

という句があり、「和韻太虚送玉巌珉侍者帰京兼呈正法雲石」など、多くの応酬詩もあるので、義堂周信の詩風の影響も受けたであろう。

正宗龍統著『禿尾長柄帚』には、

一時名宿、義堂・龍湫・太清・黙庵・絶梅・空谷・霊岳・雲渓・皆莫逆也。（「一庵大禅師行状」）

とあり、一庵一麟や雲渓支山は、当代の名宿と親交を結んでいたのである。

このほか、「次韻二条摂政大相公訪雲石於東山大龍庵」（『了幻集』）、「和韻二条大相国藤君游東山寄雲石西堂」（『雲壑猿吟』）、「謹奉同二条関白殿下韻大龍雲石禅師」（『天祥和尚録』）などを見ると、雲渓支山は二条良基を中にはさんで、古剣妙快・惟忠通恕らとも風雅の交りがあったのである。

二　『小序』の人名・地名

これ以上『小序』の作者を特定することは行き詰ってしまった。以下、作品に記される個有名詞を検討して、『小序』の五山文学に於ける位置を考えてみたい。

●一「和詩謝訪」には、某上人が作者を訪れる前に、龍門丈室に刺を投じた事が記されている。この龍門は吉水山龍門寺[20]かも知れないが、四十七「伝信」にある〝濃之龍門〟と考えられる。美濃の神淵山龍門寺は土岐頼貞が一山一寧を開山として建立した寺で、ここにも一山派と土岐氏の師壇関係が見られる。そして『空華集』七に、「又用前韻寄龍門晦谷師兄兼簡向忿楷三侍者」があり、龍門寺の詩社？　にも義堂周信の姿が隠顕する。ともあれ、一「和詩謝訪」は一山派の色が濃い。

●三「同（和詩謝訪）」は、某上人が作者を東山客舎に訪れた事を述べ、四「哀悼」は康安元年（一三六一）冬に死亡した某上人の霊前に、東山友社の器之蔵主が哀悼の偈を作る経緯（いきさつ）を記す。

東山建仁寺の器之といえば、これも一山派の大龍庵（雪村友梅の塔所）の器之令簫である。義堂周信の『空華日用工夫略集』に、

簫器之伝二条准后相公命、令題扇面詩者二扇。（康暦二、六、十四）

赴二条殿倭漢聯句会。（中略）時会者、安国相山・洞春玉岡・大龍器之・准后摂政令子梵樟侍者也。（同年、八、八）

とあって、器之は二条良基父子や相山良永・義堂周信らと和漢聯句を楽しんでいる。故に、三も四も一山派に深く関係する。

●十三「賀住山」は、西禅寺から広厳寺に栄遷した某尊属禅師に、山中に病臥する作者が献じた斐辞である。

西禅寺の開山開基は前述した通りで、『扶桑五山記』には一山一寧を開山と記しており、雪村友梅が住持となってからは、雪村の法系の度弟院となった。

医王山広厳寺（神戸市兵庫区楠町）は、赤松則祐が明極楚俊を開山として建立した寺である。西禅・広厳両寺の性格から、〝某尊属禅師〟は一山派の人であると思われ、十四「同（賀住山）」の〝宝林堂上某大禅師〟も一山派と見て間違いないだろう。

管見に入るところでは、西禅寺から広厳寺に遷住した一山派僧には相山良永がいる。『空華集』九に、「賀西禅相山遷広厳」という作が見出されるからである。

相山良永は●道元文信の項の「除夜感懐詩序」で述べた如く、建仁寺大龍庵で義堂や道元と夜話に興じ、嵯峨派の絶海中津[21]や汝霖妙佐と交り[22]、大慧派の中巌円月の教えも受けたらしく[23]、大鑑派の天境霊致らとも詩偈を応酬していた[24]。

●十五「哀傷」所出の桂堂は不明。この頃の禅僧には桂堂師林、桂堂士聞、桂堂玄定などのように、道号を同じくする禅僧が多く、特定出来ないからである。

●十六「述懐」は、都から来た某上人が作者に詩を呈して慰め、耕隠上人がそれに和したという事情を記している。惟忠通恕の『雲壑猿吟』を見ると、

佳人別去在金華（「寄耕隠侍者」）

という句があり、耕隠は金華山法雲寺に掛錫した禅僧で、一山派に属していたと思える。

●廿二「献菅神」は、播陽桑原北岡の寺に寓居する作者が、寺の隣の北野天神廟を詠った次第を述べている。『峰相記』をひもどくと、桑原（現在龍野市内）には永明門派の明欽上座が住持した慶福寺がある。蔵山順空を祖とする永明門派には、絵画史上名高い吉山明兆をはじめ、明を系字とする僧が多いが、明欽上座については不詳である。

●廿七「佳境」は、作者が静明軒の前庭に遊んだ時の作品である。龍湫周沢の『随得集』に、「和静明軒」「和韻答静明軒主裕侍者」と題する作品があり、裕侍者とは雪村友梅の法嗣謙渓令裕のようである。「和静明軒」の次に「和韻答謙渓侍者」という七言律詩があるので、私の推定は見当はずれではあるまい。するとこの廿七も一山派に関連する作品なのである。

●廿八「和詩」は、前述の如く雲渓支山の作と考えられるのであ

るが、和詩を進呈する相手の愚渓上人とは、一山派無惑良欽の嗣の愚渓浄慧である。（拙稿末の法系図参照）

●卅一「進慕」は、亡き甲之雄峰の某尊叔和尚を慕う作品である。その文章の中で、作者は南遊（中国江南地方を行脚修行）から帰国して、雄峰から僅か数里離れた牧阜に住したことを記している。牧阜とは山梨市牧丘町の常牧山浄居寺であろう。浄居寺は夢窓国師が一山一寧を勧請開山とした寺で、その後、蘭洲良芳[25]を中興開山とするなど、一山派の人が多く住持となった。大本良中もその一人である。卅一も一山派の色彩の濃い作品である。

●卅五「又（贈人）」は、良山にいる作者を某上人が訪れ、義堂周信序の送行詩軸の跋文を依頼する文章である。良山は「雪村大和尚行道記」の、

潜出金峰、掩関於良峰（暦応四年の頃）

の良峰ではあるまいか。これは雪村が金華山法雲寺を出た時の記述で、良峰は吉峰とも書き、播磨に在ったものと思われる。すると、卅五も一山派の作品ということになる。

●卅七「慶重修」は、火災に遭った妙楽寺の復興を慶ぶ文章であるが、呑碧楼のある筑前妙楽寺のことか、山城妙楽寺か不明。

●四十七「悼異域円寂」は、中国の明州延慶寺で病没した日本僧を悼んで、道原上人が悼詩を作ったのに作者が和した作品である。道原上人とは先述の道元文信で、四十七の作者は彼と同じ友社に属する禅僧であろう。

●四十四「帰隠」、四十六「送行」、五十「賞菊[26]」には雲門老師（太清宗渭）の名が記され、四十六は宝林寺竺芳祖裔の送行偈に和する作品で、この三篇も一山派の手によるものであろう。

小串範秀の子の太清宗渭は、雪村友梅の塔大龍庵主を勤め、美濃龍門寺に住した。

竺芳祖裔は一山派の石梁仁恭の嗣。『了幻集』に「和韻龍峰和尚賀常楽竺芳長老領浄妙首座」があるので、鎌倉常楽寺に住したあと浄妙寺首座になったらしい。義堂周信の教えを受け、入元して修行を重ねたが、

咸謂、和尚年徳俱邵、尚淹蕞尓。豈非輿論未公邪。（「与竺芳書」）

と義堂が書き送るように、不遇の時期があった。しかし後には、宝林・真如・建仁・南禅に歴住し、心華元棣、惟忠通恕、太白真玄らと交っている。

●六十六「椰子」は、陽明相公が採擢した椰子を賛える作品である。年代から考えると、陽明相公は近衛道嗣（一三三二～一三八七）

であろう。義堂周信の『空華日用工夫略集』（永徳三、三、七）に、

府君（足利義満）説、「於昨日永明院倭漢聯句、近衛殿句曰云々。

という記事があり、近衛道嗣は東福寺永明院（●廿二「献菅神」の項参照）で、文学僧たちと和漢聯句会を開いているが、『小序』の椰子の話は、道嗣の『愚管記』には見出せない。

●七十「梅花」は、至徳仲春、作者と妙高老人は山村の梅花を尋ねて、老人の命で詩作するという文章である。七十五「文武之才」に、〝通幻之旨〟という語があるので、妙高老人は通幻寂霊が能登総持寺に開いた妙高庵の僧かも知れないが、夢窓派の妙高とも考えられる。[27]

●七十三「古人贈言」は、一山派の大同啓初門弟[28]の某上人が、播磨の白雲山に帰る時の送行詩序である。

大同啓初は、『宝覚真空禅師語録』には、「送大同蔵主奔父喪」、「寄大同蔵主」と題する七言絶句がある。後者の起承句、

鯨波千里一身安　接信忻聞到故山

は、古林清茂に参禅して帰国した大同が、故郷から雪村友梅に便りを送った返信である。大同が宝林寺から禅興寺に遷った時、義堂は「初大同住禅興諸山疏」を作る。応安元年（一三六八）夏、禅興寺で示寂し、法嗣金仙□選は遺骨を宝林寺に持ち帰った。[29]

●七十五「文武之才」は、通幻の禅旨に参じた菊池為邦（一四三〇～一四八八）の、七十余篇の佳章[30]を朝夕吟玩した作者が、為邦の作に和答した序である。菊池武邦の家系は、

「武重
「武光―（三代略）―持朝―為邦―重朝

で、九州南朝軍の菊池武重は、曹洞宗瑩山派の祖継大智[31]（一三二二～一三九一）に帰依し、為邦は、

親参通幻之旨、吸尽洞上之玄徴、顕倣仏門外護之檀那。（『小序』七十五「文武之才」）

とあるように、峨山派の通幻寂霊（一三二二～一三九一）の法門の僧に参じたのである。

●七十四「呵筆」、七十六「傾蓋如故」は、応安三年（一三七〇）西麓延福に客居していた作者を、建長寺の旧友が訪れて久濶を叙し、日本禅林の弊風を嘆く序である。聚景山延福寺は聖一派の南山士雲が開山で、『乾峰和尚語録』『不二遺稿』によると、荘厳門派の宗芳長派や智外が出住している。しかし近江福延の延福寺では、西麓の二字が合わない。もしかすると、夢窓派の平仲中衡が住持した丹波西田の延福寺かも知れない。[32]

三　まとめ

以上、『投贈和答等諸詩小序』（『小序』と略記）の作者が翱之恵鳳でないことを明らかにしつつ、『小序』各篇の作者、記述の個有名詞を検討して、五山文学上の『小序』の位置を考察してきた。重複する所もあるが、まとめてみる。

(1)　『小序』の作者として、義堂周信、大本良中、心華元棣の三人が、他の外集・語録によって確認される。

(2)　惟忠通恕、雲渓支山の両僧も、作者と推定して間違いない。

(3)　『小序』には、東山（建仁寺）、美濃（土岐氏）、播磨（赤松氏）に地縁のある作品が多い。

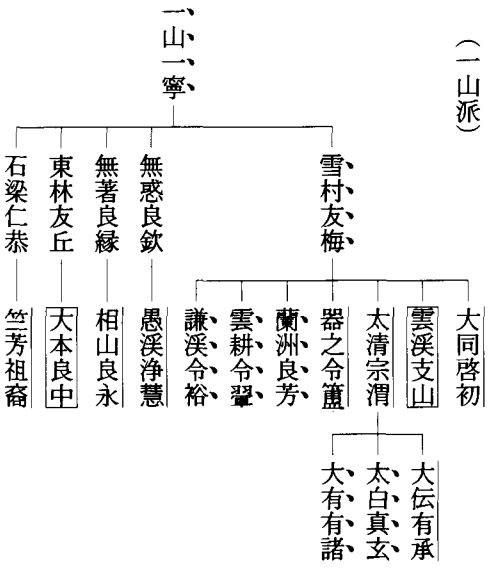
(4)　換言すれば、土岐・赤松氏の外護を受けた一山派関係の作品が大部分を占める。

(5)　さらに大胆に推測するなら、義堂周信を中心とする詩社（禅林では友社と称する）の序文を集めて、後学者の模範文集としたのが『小序』であり、翱之恵鳳はその書写者である。

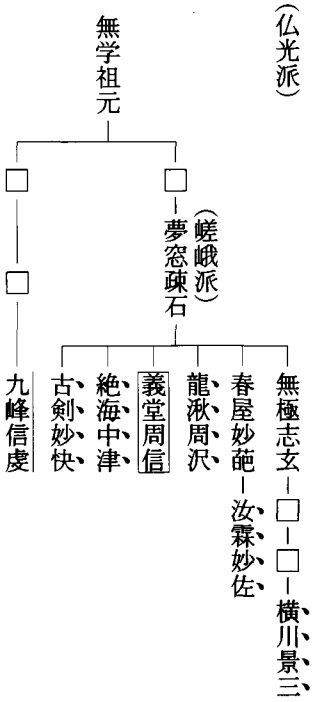
(6)　(5)で述べた友社の構成員は、次の法系図の印のある禅僧たちで、その中に俗人の二条良基らが接点として存在する。

（次の法系図で□は『小序』の作者。傍線は『小序』記載人物。傍点は関連のある僧。）

（一山派）



（仏光派）



（大覚派）

蘭渓道隆
- 約翁徳倹
  - □－頑石曇生－心華元棣
  - □－仲方円伊
- 桑田道海－□－鈍夫全快
- □－石庵旨明

（法海派）

石渓心月
- 大休正念－□－□－惟忠通恕
- 無象静照－□－□－謙中（大中）善益

（聖一派）

東福円爾
- □－虎関師錬－龍泉令淬－在先希譲
- □－□－□－□－岐陽方秀－鞠之恵鳳
- 蔵山順空（永明派）
- 南山士雲－乾峰士曇

（宏智派）

東明慧日
- ……中巌円月
- 別源円旨－月渓□明

（……は受業関係）

注

（1）『五山文学全集』第二輯（昭和四八・思文閣）一六二五頁。

（2）拙著『訓注空華日用工夫略集』（昭五七・思文閣）二九五頁。

（3）寺田透『義堂周信・絶海中津』（昭五二・筑摩書房）。玉村竹二『日本の禅語録八・五山詩僧』（昭五三・講談社）など参照。

（4）『五山文学新集』別巻二（昭五六・東京大学出版会）九二頁。

（5）一山一寧が開山、二階堂信濃守が開基。

（6）栄朝が開山、新田義季が開基。『空華集』十一に〝且つ聞く、大本禅師、徒を長楽に訓じて後、風俗之が為に一に革まる。〟（「送巧上人帰上州詩序」）とある。現在は天台宗に属す。

（7）開山は大覚派の鈍夫全快で、その法嗣の秀涯全俊も、中国で宋景濂と方外の交を結んで帰国すると、善応寺に住した。大本良中はこの寺で遷化した。現在は曹洞宗の寺。

（8）行政疏とは、行宣政院が新命住持の高徳を証明して、入院を命ずる文書のこと。「仙竺心住長楽江湖疏」（『空華集』十九）に、〝貞治甲辰の夏、朝廷より旨有り。関東の幕府始めて行宣政院を置き、十州管内の禅教諸刹を以て属す。歳の冬十月十二日、府君左武衛大将軍源公躬から院事を領す〟（原漢文）とある。

（9）『五山文学新集』別巻二の四八八頁以下。

（10）玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（昭五八・講談社）

（11）経歴は（10）の書に詳しい。

（12）『五山文学新集』第一巻、三七三頁。

（13）大有有諸は「雪村大和尚行道記」の撰述者で、はじめは天境霊致の会下にあって、無漏清霤と称していた。

（14）汝霖妙佐は、初めは良佐と称し、良の系字から推察すると、一山派から嵯峨派に転じたものと考えられる。

（15）心華元棣の作った「前席慈寿大春住宝林山門疏」に、〝宝覚門産出石麒麟〟とあるので、やはり雪村友梅の法系に連なる人である。慈寿とは長野県南佐久郡の仏国山慈寿寺のことで、開山は一山派の石梁仁恭である。

(16) 原蔵者、建仁寺両足院の御好意ある許しを得て、東京大学史料編纂所架蔵の同書写本を閲覧。

(17) 『延宝伝灯録』二十二に拠ると、宝華山護聖寺は赤松師範が神崎荘永良に建立し、雲渓支山を開山に請じた。

(18) 雲渓は雲石とも称した。玉村竹二氏は、〝雲石を雲渓に改めた〟と順時的改称と解しておられるが、雲渓書記、雲石西堂という用例がある。普通、書記や首座の後に西堂に昇位するので、順時的改称ではないらしく、併用の時期があったのではないか。

(19) 乾峰士曇は赤松則村に「月潭」の道号を与えている。赤松氏、乾峰、雲渓の三者は互に交りを持っていた。

(20) 古剣妙快の『了幻集』に、「和韻答吉水山龍門長老」「和龍門長老見訪韻」があり、前者の転句に、〝極到曹源無一滴〟とあり、曹源は一山派をさす語なのである。又、心華元棣の龍門座元住甲州浄居江湖疏」に〝某、大雲詒厥、吉水寧香〟とあり、大雲は一山一寧の塔名である。

(21) 『蕉堅藁』に、「永相山住京城安国茶湯榜」がある。

(22) 『汝霖佐禅師疏』に、「永相山住京城安国山門疏」「永相山和尚住建仁道旧疏」がある。

(23) 『東海一漚集』の「文明軒雑談」に、〝相山永上人、致一叢於窓前梅樹下、殊添佳境可喜也。作詩為喜云〟という文章がある。

(24) 『無規矩』に、「次太清西堂寄相山書記臨川閑居」「次大山西堂礼和州片岡達磨塔韻」がある。相山は初め大山と称していた。

(25) 赤松一族の喜多野義綱は、播磨北山に大義寺と金剛寺を建立して、蘭洲良芳を開山とした。蘭洲も播磨及び赤松氏と縁がある。

(26) 五十「賞菊」は太清宗渭の名は無いが〝雲門老師興而過焉〟という雲門老師は、南禅寺に雲門庵を創めた太清宗渭をさす。

(27) 中巌円月『東海一漚別集』に、「妙高首座住定林諸山疏」があり、美濃定林寺は土岐頼貞が建立しているので、この僧の可能性の方が大きい。

(28) 大同啓初の法嗣には、金仙□選、南堂良偕、用文侑藝、弥中□堅らがいる。

(29) 『空華集』二の「送選書記帰赤松山并叙」に、〝戊申夏、前宝林大同禅師遷主福源、未幾示寂。有上足金仙選記史、将奉骨石帰山而塔之。有感作二偈贈行。其一則兼寄赤松公自天居士、通方外之交也。〟とあり、義堂は赤松則祐と好を通じ、ひいては、一山派と交わっている。

(30) 菊池為邦の作品は残念ながら管見に入らない。しかし希世霊彦の『村庵稿』に、「致菊池藤重朝送育季材赴京師倡和詩後」と題する文章があり、その中で〝公之詩与公之名、盛伝輦轂之下、以聞於鹿苑大僧録〟と、菊池為邦の子重朝の詩名を賛えている。なお、吉川弘文館『国史大辞典4』四九頁の「菊池為邦」の項は、この七十五「文武之才」の一節を掲げ、作者を翺之恵鳳としていて、私と同じ誤りを犯している。

(31) 水野弥穂子『日本の禅語録　九大智』(講談社)、鈴木素田『大智禅師偈頌訓注』(其中堂) 参照。

(32) 『臥雲日件録抜尤』(文安四、八、十九) に〝延福寺将帰、話及平生出処進退。平仲曰〟とある。